

# ベルクソンにおける美的情動としての性愛 —新プラトン主義の思想史的源流を意識して—

土屋 靖明

## 序

ベルクソンは『道徳と宗教の二源泉』で愛(*amour*)の概念を論じているが、それは原則的に慈愛(*charité*)に相当するものである。

「福音書こそはわたしの眞の精神的祖国」というベルクソンにとって、『二源泉』で展開される「愛の躍動」すなわち「エラン・ダムール」(*élan d'amour*)は、福音的なアガペー(*agape*)的慈愛の伝播、キリスト教的な博愛精神の伝導を示しており、他者に遍く注がれる仁愛について語つたものとなる。

然らば、ベルクソンについて「二者間に成立する性愛(*amour*)、すなわち恋愛という特定の個人のみに関わる愛情は如何なるもののか。性愛に関しては、『二源泉』の中、「I」「せねばならぬからせねばならぬ」(il faut parce qu'il faut)という衝迫的な責務(*obligation*)の形式を探ねむのふつて(MR35-36)、「II」自然的な性愛(*amour naturel*)へ中世的なロマン的愛(*amour romanesque*)の系譜にあるむのふつて(MR38-39)、僅かに二頁四箇所で論じられてゐるに過ぎない。ベルクソンの性愛論に関する

評論も、管見の限りジャンケレヴィッヂが「女性の愛」をロマン的愛との関連で、「尊敬の帰結から始まるものでもなければ、友情から始まるものでもなく、それ自身から始まる。「今すぐに、でなければ何でもない」と、刹那的なものと説明したくらいである。

プラトンは主に『饗宴』や『パイドロス』で、プロティノスは『エネアデス』第三論文第五論集でエロス(*eros*)について論じている。ベルクソンの文献にはエロスという言葉は見当たらない。けれども、本稿で敢えて取り上げようとする性愛という自然的な恋愛感情は、極めてプラトニズム的、ネオ・プラトニズム的な概念となるのではなかろうか。

ベルクソンは「プロティノスこそ、すべての古代哲学者たちの中でも最も自分の心情に類縁な哲学者だと思っています。……プラトンについては、すでに申し上げましたように、かれを崇拜しています」と、プラトンやプロティノスに傾倒していた旨を述べた上で、「プラトンについて、ただ一つのことしか論難しています」(3)と、それはあまりにも言語にこだわり過ぎたということ、したがつて、かずかずの偉大な直観をいだきながら、特に言語哲学を

立てるにとどけた、といふことです。アリストテレスも同様です。<sup>④</sup>「*プラトンは神的なもの (teos)*を、抽象的な主知主義に立つ彼の道徳論に生命を与えるのに援用したものと見なしていますが、この抽象的主知主義こそわたしがプラトンにおいて批判したものであり、わたしはかの「神的なもの」を（アレキサンドリアの哲学者たちの）神秘主義において見出した」と、*プラトン*のロゴス重視の主知主義を批判し、自身の神秘主義的態度を明確化した。

*プラトン*は恋する人 (*erastes*) の心境を「この世」の美を見て眞実の美を想起し、飛翔しようとする神がかり的 (*enthousiasme*) な狂気、最も善きものから由来する狂気 (*mania*)」 (*Phaedrus*, 249D-E) や、*プロティノス*も「エロスは質料的なもので、魂が善を欠いてこれを思慕する時に、その欠如と思慕の程度に応じて、魂から生まれてきた神靈 (*daimon*) である」といふことになるだろう」 (*Enneads*, III 5. 55-57) と説明している。エロスという概念こそおやしくベルクソンの「神的なもの」であり、そのような神的な要素が*プラトン*に始まり、*プロティノス*を経由してベルクソンにまで受容されているとの解釈も出来得るであろう。

ベルクソンは性愛について、ルクレティウスの見解、中世に起源を有するロマン的愛、キリスト教神秘主義と忘我 (*extase*) という新*プラトン*主義思想史においても極めて重要と思われる概念と関連させて論考している。故に、本稿ではベルクソンの性愛に関する記述を、次の三點に焦点を充てて考察して行きたい。  
[I] 機能としての性愛の感情、すなわち種の保存を目的とする

性衝動と性交渉に伴う快楽について。「II」美的情動としての性愛。①妄想 (*illusion*) や錯覚としての表層的情動をベルクソンのルクレティウス論を参照しつつ、②精神に内的激変を躍起させるような深層的情動に関しては、自己生成の可能性との関連で検討したい。そして、「III」性愛において慈愛 (アガペー) 的要素を見出すことにまで論考を進めて行きたい。

## 一 性衝動としての性愛

### 一種の保存のための衝迫と性行為の樂しみ—

#### ①性衝動と性交渉について

性愛の感情は「行動に対する確かに衝迫」 (MR36) であり、「何事かを否応無く迫るという点で責務に似たもの」 (MR36) である。我々の本能に内在する生理的本性、性欲を処理しようとする願望がそうさせるのであらうか。エロス的愛とは、肉欲、性欲の対象なのかもしれない。性愛の感情は責務の形式を採り、対象を選択するという意味で、閉ざされた愛なのである。

「性愛の熱情 (passion)」を、とりわけその萌し (*débuts*) において分析してみよう。性愛は快楽 (*plaisir*) を目指しているのと同様に、苦痛 (*peine*) をも目指していくと言ふなくはないだろうか。悲劇が待ち受けているかもしけず、挫折し擦り減らされ一生を台無しにするかもしれないことは判っているし、感じてもいる。けれども、どうでもいい。せねばならぬから、せねばならぬのだ。生まれ出た熱情は物凄く危険なもので、義務と何ら異なるところはないのである。」 (MR35-36)

「自分を惹き付ける対象に真っ直ぐに向かって行き、そこに腰を落ち着け」（MR35）のような性愛感情。そうした感情は、「ひたすらの愛 (*n'est qu'amour*)」（MR35）である。生理的衝動に純粹な愛とでも言へばいいであろうか。理性的な制御をもろともしない、言わば一方通行の愛である。自己の種を保存しようとする自然の摂理が、人間の魂をそうした境地へと駆り立てるのだらうか。ベルクソンは責務や義務を「拘束する」（*obliger*）を本務とする閉ざされた道徳と考えているが、こうした熱情もまた自己の魂を問答無用に、盲目的な衝動へと誘つてしまつのである。

「自然是確かに、人間が他の全ての生物と同様に、際限なく子孫を産むことを望んでいた。自然是細心の注意を払い、個体の増殖による種 (*espèce*) の保存を確証していた。自然是我々に与えた知性が、性行為がその帰結と切り離す方法を見つけ出すこと、種を撒く楽しみを断念せずに、収穫をしなくて済ますことを可能とさせるところを予見できなかつた。」（MR55）

人間知性は、性行為と生殖とを切り離す方策、すなわち避妊の方法を発明し、たゞ単に性行為を楽しみたいからすることを可能とさせた。避妊は快楽のみを目的とする性行為のためのものであり、「快楽は自然が生きものに生命を維持させるために編み出した策略 (*artifice*)」（ES23）なのである。性交渉もまた、美的感情と一緒にものである。種を撒く楽しみとは男性の性欲に、生理的機能に特徴的なもので、或る意味において、征服的欲求と膨張的

欲求の端緒ともなり得る。しかも、それは性愛感情といつよりも性衝動そのものなのである。

生命は目的的に、本能的に「個体または種を保存しようとする欲求」（MM222）を有している。ベルクソンは「回は回を生む (*le même produit le même*)」（EC29）、「同を得るには同を要す (*il faut le même pour obtenir le même*)」（EC45-46）を原理とするライプニッツの機械論や目的論を批判してはいる。それはアリストテレスの「人間は人間を生む (*anthropos gar anthropogen*)」（*Metaphysics*, 1032a26）という発想の系譜に位置付けられる考え方であらうが、自己の種を保存するためには、自己と同じものが必要とされる。プラトンがアリストテレスに語らせた両性具有者 (*androgynos*) の神話によれば（*Symposium*, 189e）、性愛とは自己の失われた半身を求める営みとなる。自己の種を保存するために、異性に自己と同質のものを求めることも性愛の熱情なのである。

デューアイは「アリストテレスが形相 (*eidos*) と呼んだ語を、スコラ学者は種 (*species*) と訳した」と説明しているが、プラトニズムの下では恒常不変とされる種の概念も、「持続の相の下に (*sub specie durationis*)」（PM176）を原理とするベルクソニズムの下では不斷に変異するものとなる。いわむしや、生成し、創造的に進化するものとなる。然らば、ベルクソニズムにおける性愛とは、種を単に保存するだけではなく、自己以上のものへと向上させ、進歩させるために、対象により優性なものを求める営みとなる。

## ②女性の愛について

「女性はいつの時代も、男性に対しして欲情 (désir) とは異なる慕情 (inclination) を抱いていた。とは言つものの、この慕情は欲情と隣接しては溶け合つており、感情と感覚とに同時に与るものであった。」(MR38-39)

ジャンケレヴィッヂがベルクソンの言つ女性の愛をそれ自身から始まるものと説明したように、女性の性愛感情とは男性に心を傾け預けるもの、心密かに思慕する奥床しいもの、募る想いそのものを喜悦し自己充足するものなのではないか。すなわち見返りを期待しない無償の愛、ひたすらの愛であり、男性の抱く恋心とは趣を異にしているのであろう。

「宗教的情動が女性において、思いもよらない深さにまで達していることがある。けれども、自然は恐らく女性を育児に専念させ、最も優れた感受性 (sensibilité) をとても狭い限界内に閉じ込めようとした。育児の領域では、女性は比較にならないほど優れており、ここで的情動は先見の明があるという点で、知性以上である。我が子に注がれた母親の感動に溢れた眼差しの前には、一体何が浮かび上がつているだらうか。おそらくは錯覚 (illusion) に過ぎないのであろう。はつきりしたことは分からぬ。実在は可能性の塊である」と、母親は子どもの中にただ単に将来を見ているのではなく、成ることを可能とする全てを見ているのだ。」(MR41-42)

母の愛は、女性の愛とは異質なものである。母親になると、女性は美的情動としての恋心、異性に対する性愛の情を抱かなくなるものなのであらうか。我が子に対する愛情は、男性には計り知れないもので、我が子に寄せる希望は多大なものとなるのである。ただ、「親の欲目」という言葉もあるように、我が子の力量を錯覚し、器量以上の期待をしてしまうこともあるのかも知れない。また、母の愛は対象を我が子のみに限定してしまってい。独占欲に近く、閉ざされた愛には変わりのないものなのである。けれども、我が子に対する母の愛情は極大であるが故に、「我が子の死を看取った母親を前にして、何を思うのであらうか。言うまでもなく、その苦悩は戦慄を禁じえないほどの現実を突き付けてくる」(MR277) のである。

## 二 美的情動としての性愛

### — 表層的なものと深層的なもの —

#### ①妄想や錯覚としての性愛感情 — 表層的情動 —

性愛は醒めてみると、しばしば幻滅感や失望感が付き纏い、勘違いで終わる場合もある。その要因は如何なるものなのかな。この問い合わせに、ベルクソンが興味深い回答を示している。

「性愛が讚嘆 (adoration) に近ければ近いほど、そこでの情動 (émotion) と対象との不釣合いはますます大きくなりしたことは分からぬ。実在は可能性の塊である」と、り、従つて恋をしている人 (l'amoureux) が受ける幻滅感 (déception) もそれだけより深くなる。対象をただ情動を通して眺めるだけにし、手を触れずに宗教的に接することに努

めない限りは。恋愛における妄想については既に古代人に  
よつても語られているが、愛する対象としての女性の容姿、

背丈、歩き振り、キャラクターに関する感覚の錯覚に類する  
錯誤に過ぎない。ルクレティウスの叙述が思い起こされる。  
妄想は単に愛される対象の性質に関わるだけのものであつ  
て、現代人の妄想と同じく、愛に期待し得るものにあつたわ  
けではない。古代人の妄想と我々がそれに付加した妄想との  
間には、対象それ自体から発せられた原初的感情とそれを覆  
いかつ溢れ出るに至つたところの外から呼び起こされた宗  
教的情動との間の差異に等しいものがある。神的なものと人  
的なものとの隔絶に他ならないが故に、幻滅が起きる度合い  
は莫大なものとなるのである。」(MR39)

ベルクソンは「情動とは魂の感動的振動のことであるが、表面  
が動搖するものと深部が震撼させられるものとでは全く異質な  
ものである」(MR40) と述べているが、妄想としての性愛は、單  
に魂の表面が動搖するに過ぎないものである。妄想としての性愛  
は単なるのぼせや思い込みに過ぎないものである。妄想的愛であ  
る。恋の駆け引きなどもゲーム性を示しているに過ぎず、本心が  
観得されてしまうとエピローグを迎えるものである。自己の内部  
に革新的な変容を惹き起こすこともなければ、啓発されることも  
ない。單に対象に依存しているだけで、相手に対する本当の意味  
での思いやりもないものであろう。妄想としての性愛は、対象の  
肉体的性質のみに囚われていたり、己の虚栄心や実利的欲求の為  
せる業であつたりする。或いは孤独感や寂寥感がそうさせるのか

もしれない。いずれにしても、対象の精神的本質に関与するもの  
ではないのである。

ルクレティウスは古代ローマの詩人であり、エピクロスの系譜  
を継いでアトム論を開いた哲学者でもある。「物の本性について  
」が現存する唯一の著作であるが、若年期のベルクソンはルク  
レティウスを愛好し、「ルクレティウス抜粋」という評論文が『書  
簡・講演録』に収録されている(EP17-56)。ただ、この評論の中  
ではルクレティウスの恋愛論に関する言及は行なわれておらず、  
妄想としての恋愛に関するルクレティウスの見解を直接的に引  
用してみたい。

「色欲に盲目になると、女が実際には持つていない美点を  
持つてるように思い込んでしまう。従つて、多くの点で歪ん  
だ醜い女が可愛らしいと思われたり、最も誉れあるものと遇  
されているのは、我々の見受けるところである。」

「アバタもエクボ」という諺にもあるように、妄想的な愛に関  
しては、古代人ルクレティウスから現代人ベルクソンの論説まで  
をも貫徹する普遍性があるものと思われる。それは或る意味において、「美的感情 (sentiment esthétique)」(DI9)、それもとりわけ青少年が陥りがちな性愛の過ちとしての美的感情なのである。

## ②自己生成の駆動力としての深摺的情動

### —精神のエネルギー—

性愛は自己を生成させる駆動力、人間を成長させる駆動力とも

なる美的情動である。性愛のエネルギーが自己の魂の内に激変を起こさせ、精神的発達に多大な効力を与えたりもする故に、とりわけ青少年期の人間生成にとっては不可欠な体験と言えるのではないか。

「ロマン的愛には、日付がある。それは中世に誕生し、自然的な性愛を超自然的とも言つべき情操 (sentiment) の中に、キリスト教が創造して世界の中に投げ入れた宗教的情動の内に吸収されることを思い付いた日がそれである。神秘主義は性愛的熱情の形式を表現したものとの批判もあるが、熱、躍動 (élan)、忘我を神秘主義から拝借したのは性愛の方であるということを忘れてはいる。神秘主義が変容させた熱情という語を使用したとしても、自己の財産を取り戻したに過ぎない。」(MR39)

情動には、魂の表面が振動するだけのものと、魂の深部が震撼させられるものとがある。後者の情動は「効果が分散せずに残存する」(MR30) ものであり、「全体が前方へと衝き動かされる」(MR40) ものである。「感覺とは質を異にする感動状態」(MR40) であり、「知性以上のもの」(MR41) である。ロマン的愛とはまさしく、魂の深部が感動で震撼させられる情動のことであろう。ロマン的愛とは、<sup>(8)</sup>愛しい人への愛ではなく、愛そのものへの愛、死に接する愛である。見返りを期待しない無条件の愛、ひたすらの愛である。そして、こうした愛こそが自己生成の駆動力、人間を成長させるエネルギー源となり、美的感情よりも「激しい情動

(émotions violentes)」(DI23)、すなわち美的情動なのである。

ベルクソンはロマン的愛をキリスト教神秘主義が誕生させたものと説明したが、それはプラトニズムまたはネオ・プラトニズムの性愛論をキリスト教神秘主義が発展させたものと言えるのではないか。ベルクソンは「聖アウグスティヌスと聖トマス、前者の熱意 (fougue) と後者の論理を兼ね備えている」<sup>(9)</sup>と、宗教的情動の源泉を聖アウグスティヌスに求めている。プラトンからプラティノスへと受容されたとも思しきエロス的情動の思想は、プラトン哲学とキリスト教とを融合する役割を果たしたアウグスティヌスを仲立ちとして、キリスト教のロマン的恋愛の情動へと進展したのだろうか。スタンダールが情熱恋愛の好例に挙げるアベラールとエロイーズの恋<sup>(10)</sup>こそまさしく、中世ロマン的愛の典型例と思われる次第である。

プラトニズムのエロス論にも、より高く飛翔しよう、自らを向上させよう、成長させようとする自己生成の要素が見受けられるのではないか。こうしたエロスの境地は、ベルクソンの表現を用いれば「或る特權的な瞬間に魂を揺さぶる強力な感情」(PM243) と謂うことになるのである。ただ、こうしたエロス的愛は、得てして叶わぬ恋、成就の見込みのない片想いの恋であつたりする。プロティノスの「自己の姿に見惚れる (to eidoron autou blepon)」(Enneades, V 8. 3. 34-35) という表現にもあるように、「水面に映った自己の姿に恋をしたナルシス」のようなもので、恋のための恋、恋に恋している恋であつたりもする。何故ならば、こうした性愛は自己の心理描写に終始しており、相手の心境は全く問題とされていない

からである。そうした性愛感情は自己の中だけで燃え上がるるもので、ネガティブに作用するとパラノイアのような偏執性や付き纏いとなつてしまつたりもするのであろう。

トマス・マンも『パイドロス』に関心を寄せて、初老のグスタフ・フィアッセンバッハと美少年タッジオとの関係について、「愛

する者は愛される者よりも一層神に近い、なぜなら前者の中には神があるが、後者のなかにはないからだ」と文筆し、肉欲の伴いにくい「同性愛は異性愛よりも精神的要素が強く、純粹無垢な力を持つていて」とも解説されている。<sup>[1]</sup> ただ、異性愛であっても、ダンテとベアトリーチエ、ペトラルカとラウラの関係などは極めて精神的純度が高く、前者の中には神が居て、後者の中には神が居ないものとなるであろう。

「神秘的な天賦の才（don）は、自然に授けられた才である。こうした天賦の才を持たないものは、努力する。彼等が同じくらいの能力を持つていることも有り得るが、努力は結実しない。……神秘的な天賦の才には、或る種の無動機さ、或る種の傾向がある。神は我々を選民へと生成すべく全てのものを創造し、全てのものを永遠にそつあるべく予め定めたのであり、わたしは神と結ばれている。聖靈（Esprit）がそうした資質に働きかけて、何ものかを引き出す。主体とは、至福を与える見神に秩序付けられた人間性である。超自然的生に向いた素質がある。この素質は、天性のものである。……それは音楽の素質と同じことである。大音楽家とは、神がそのような素質を与えた者のことである。……神秘思想家には、神

の恩恵を受け入れるだけの天賦の才がある。受け入れる。この才は天性に根ざしている。これは感嘆し、理解する能力である。素質を受け入れるために自己を忘却する能力、神の生において全てのエネルギーを汲み取り、増大する能力。<sup>[12]</sup>

性愛もまた才覚と同じく、神秘的な天賦のものであり、成就させようと努力しても、結実しないものは結実しない。一方通行のままでは、終わるものは終わる。成就する恋とは、天与のもの、無動機的なもので、自然とそうなるべく宿命付けられている。そうした巡り逢いは、一種の奇跡的なものである。ベルクソンは「天（ciel）において、自由とは、自由であると同時に神に結ばれていることである。宗教的生、こうした神の至上の贈与、この服従は、至上の自由であるところの意思と結び付いている」と述べているが<sup>[13]</sup>、成就する恋とは二者を神が結び付けてくれるもの、天使が介在するもの、聖靈が自然とそうなる方向へと仕向けてくれるもの、予定説（prédestination）でもつて語られるものなのではないか。

「偉大な芸術と単なる幻想（fantasie）の違いは、何処にあるのだろうか。ターナーやコローを前にして、我々が体験することを深めてみよう。我々が絵を受け入れ、感嘆するのは、それらの絵が示す何ものかを我々が既に感知していたからだということが理解されるであろう。我々にとっては、日常経験でへ溶暗（dissolving views）として覆われていて、通常我々が事物について持つ蒼褪め色褪せた光景を構成する

ところの、同じように輝いては同じように消えていく無数の光景の中で、消失されていった一つの輝かしくも夢い光景であったのである。画家はその光景を孤立させたのである。

彼はその光景をカンバスの上にしっかりと固定させたので、以後我々は彼自身が観たものを実在の中に認めざる得なくなつたのである。」(PM150)

ベルクソンは偉大な芸術と單なる幻想との差異について語つてゐるが、このことは性愛に関しても言えるであろう。芸術もまた美的情動の創造物であり、表層的振動に留まるものが单なる幻想に終わる一方で、深憾的振動にまで至つてはじめて、芸術作品としての格調が備わることになる。性愛もまたしばしば芸術的創作の対象となってきたのではあるが、魂の震撼の度合や程度に応じて、单なる妄想に過ぎないものであつたり、ロマン的愛へと発展したりもあるのであらう。

「芸術家が常に〈理想主義者〉と考えられてきたことに着目しよう。芸術家は、生活の実利的物質的側面にそれほど心が奪われていないので理解される。芸術家は本来的意味において、〈浮世離れした人〉(distract)なのである。」(PM151)

恋する人(erastes)もまた、〈浮世離れした人〉である。プロトン的に言えば、最も幸いな狂氣の虜となつた人のことである。恋する人もまた、生活の実利的物質的側面にそれほど心が奪われて居ないので、〈理想主義者〉と考えられるのであらう。

### 三 性愛における慈愛(アガペー)的因素 — 伴侶の間の愛 —

ベルクソンは「新約聖書の方が旧約聖書よりも、遙かに優れている」と話している<sup>[14]</sup>。また、「聖パウロ、聖テレサ、シエナの聖力タリナ、アッシジの聖フランシス、ジャンヌ・ダルク」(MR241)などのキリスト教神祕主義者や殉教者が、ベルクソンにとっての英雄、「精銳(Élite)」(MR90)、「超人(sur-homme)」(EC267)なのである。ジャンヌ・ダルクに代表されるように、神秘主義者は魂の深く純粹な神祕性、聖なる自然の声への絶対服従を体現した人たちのことである<sup>[15]</sup>。ベルクソンはまた「聖者は、私にとつては眞の超人です。」<sup>[16]</sup>チエは聖者の贋造物を証示したに過ぎません」とも述べている。

聖パウロはベルクソンにとつての眞の超人、道徳的英雄の筆頭である。然らば、『新約聖書』の中でも、とりわけ聖パウロの思想に開かれた道徳、開かれた魂、開かれた愛の究極が觀ることができるのではないだろうか。

「愛(agape)は寛容である。愛は情け深く、妬むことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、無作法をしない、自分の利益を求めるない、苛立たない、恨みを抱かない。不義を喜ばないで、真理を喜ぶ。そして、全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てに耐える。愛はいつまでも絶えることがない。」(「コリント人への手紙」第一三章第四節一八節)

聖パウロにも、思想のみならず異邦人伝道という実践功績がある。所謂「愛の讃歌」とも言われる一節は、聖パウロがコリント人に伝道したものである。ここでの愛とは、*eros*ではなく*agape*、すなわち慈愛であることに着目したい。ここでの愛とは、美的感情、美的情動とは異質なもの、情愛、熱愛、激愛などとは異質なものである。成就する性愛、永遠に持続する愛情、すなわち伴侶の間の夫婦愛は、エロスではなくアガペーである。それは精神に安定を贈与し、二者間に成立する慈愛なのである。恋愛感情は烈しくも、慈愛は穏か、和やか、たおやかである。恋愛感情は心の飢えや渴きに由来するものであろうが、慈愛は心豊かで、安堵感を与えてくれる。恋とは異なり、愛は燃え上がることもなければ、醒めることもない。健やかなる時も病める時も、終生変わることはない。いやむしろ、死後も、変わることはないであろう。配偶者の間の愛情は、人格が完成された成人者の愛とも言うべきもので、成人期を継続して生涯的な次元で学び、獲得されるものなのである。

## 結語

ベルクソンのいう性愛とは「神的なもの」とも形容されるもので、その神的なものこそがプラトンにはじまり、プロティノスを経由して、ベルクソンをも影響下においたものである。性愛の形態については、「I」性衝動としての機能的性愛、すなわち種の保存のための衝動と性行為を楽しむための性愛、「II」美的情動としての性愛、「III」精神の安定が得られる慈愛としての性愛、すなわち伴

侶の間の愛を意味するもの、以上の三要素が考えられた。前二者が肉欲とも不可分なエロス的愛とすれば、第三者はより精神的に純度の高いアガペー的愛となる。スタンダールの表現を拝借すれば、性衝動としての恋愛は肉体恋愛、妄想としての恋愛は趣味恋愛または虚栄恋愛、自己生成のための恋愛は情熱恋愛に該当するのである。それが二者間の間のものであっても、アガペー的愛の境地に到達してはじめて真性の（慈）愛を獲得したことになるのである。

エロス的愛に該当する性愛は恋のことであり、美的感情または美的情動を伴うもので、甘美と苦悩とを同時に経験させるものである。種の保存に対する欲求が性衝動としての機能そのものであるとすれば、性行為を楽しむ恋愛は或る意味において遊戯的なものとなり、愛情と陶酔の履き違えては陥りがちな過ち、妄想なのである。一方で、自己生成の駆動力となる恋愛は、人格的成长や人間形成に寄与するものであり、人生に教訓を与えてくれる。けれども、精神的な安堵感を齎してはくれない。それらは成就しないという意味では報われない愛ではあるが、自己生成においては多大な役割を果たす性愛感情なのである。

エロス的愛にアガペー的愛が透入されてはじめて、人間精神は成熟を迎えるものと思われる。こうした慈愛が配偶者の間に、伴侶の間に成立することになるならば、それはいついつまでも絶えることのない、永遠の愛となるのである。

最後に、ベルクソン自身の性愛姿勢は如何なるものであったのだろうか。「ベルクソンは生徒たちを直接的個人的に捉える情熱的で親しみ易い先生ではなかつた」との指摘から<sup>(17)</sup>、ベルク

ソンは内氣で人見知りする性格であれいふが窺い知れんがで  
ある。ベルクソンは恐らくは奥手で莊重だったのであつた。ベ  
ルクソンは「スコアーム＝ルのような観念連合説的決定論  
(déterminisme associationniste)」は、自我を心的諸状態の集合  
体と表象し、最も強力なもの (le plus fort) が優勢な影響力を  
行使し、他の諸状態を引き摺つてこらむのだとする」(DI119) と  
した上で、「連合説の見地に立つた時でやれども、動機 (motifs) に  
よつて行為を絶対的に決定できるとは主張するには困難である」  
(DI119) と、ミルの考え方を批判した。心的状態において最も強い  
ものが動機となつてその人の行動原理を支配すると考える功利  
主義的なミルの場合は、恐らく性愛に関しても現世的で、積極的  
かつ情熱的だったのではないか。けれども、聖人的なベルク  
ソンは、遠慮し、慎しみ、そして譲歩するとこら謙讓の美德を恐  
るべくは有していたのであつた。

- *La pensée et le mouvant, 1934…PM* (『思想と動くもの』)
- *Matière et mémoire: Essai sur la relation du corps à l'esprit, 1939…MM* (『物質と記憶——身体と精神の関係に  
ついての試論——』)

- *L'évolution créatrice, 1941…EC* (『創造的進化』)
- *L'énergie spirituelle: Essais et conférences, 1955…ES* (『精  
神のエネルギー——試論と講演集——』)
- *Écrits et paroles, 1957…EP* (『書簡・講演集』)

プラトンの原著作は *Platoni Opera I-9*, Oxford University  
Press, 1995 を、邦訳は岩波書店の文庫版と全集版参照。ブ  
ロトイノスの原著作は *Plotini Opera I-3*, Oxford University  
Press, 1977 を、邦訳は中央公論社『世界の名著』版を参照。  
アリストテレスの邦訳は岩波文庫版。

## 【註】

- (1) Antoine Dalmace Sertillanges, *Avec Henri Bergson*,  
Paris, Gallimard 15 Avril, 1941. (〔鷗唯義訳『アヘン・ベ  
ルクソンへ』〕) — 持続論・科学論・宗教論 — K  
& K. Kappaïeff, 一九七六年、一四頁。
- (2) Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1985, p.  
186. 匠部一智・桑田禮彰訳『アヘン・ベルクソン』、新評論、  
一九八八年、一二五四—一二五五頁。
- (3) セルティランジュ前掲書、四六頁。ベルクソンと新プラト  
ニ主義に関する先行研究などは、拙稿「ベルクソンにおける  
ネオ・プラトニズム——美の(形)相と直觀——」(『新  
プラトン主義研究』第二号、新プラトン主義協会、1100四
- *Essai sur les données immédiates de la conscience*,  
1927…DI (『意識の直接性と闇かねの問題』)
- *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932…
- MR (『道徳と宗教の一源泉』)

年、一一四—一五頁)を参照。

(4) 回上、二二二頁。

(5) 同上、四五—四六頁。

(6) John Dewey, "The Influence of Darwinism on Philosophy",

*The Influence of Darwin on Philosophy, and other Essays in Contemporary Thought*, New York, Peter Smith, 1910, p.

5.八杉龍一訳「ダーウィンの哲学への影響」『ダーウィンズム論集』所収、岩波文庫、一九九四年、二二二九頁。

(7) Titus Lucretius Carus, *De rerum natura*, London, The Loeb Classical Library, 1927, 1153-1156. 稲口勝彦訳『物

の本質について』(岩波文庫)、一九六六年。

(8) 澤瀉久敬責任編集『世界の名著六四 ベルクソン』中央公論社、一九七九年、森口美都男訳、二二五五頁。

(9) Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson: Avec un fac-similé hors-texte*, Paris, Librairie Plon, 1959, p. 260. 仲沢紀雄訳『ベルクソンとの対話』、みすゞ書房、一九六九年、二九二一頁。新トマス主義者のマリタンは「理性による神の存在証明が不可能」との理由から、ベルクソンを反対性主義者と批判している(Jacques Maritain, *La philosophie bergsonienne*, Paris, Librairie Marcel, 1930, p. 221).

Translated by Mabelle Andison, *Bergsonian Philosophy and Thomism*, New York, Philosophical Library, 1955, p. 188)。それに対し、ベルクソンは「トマス思想は現代の一部の信奉者が紹介してくる偏狭なトマス主義よりも、遙かに豊かであるように思われる。カトリック神学が考える永遠が、

持続の否定とは思えない。神の知性(intelligence divine)にねじて、未来は未来として表象されることは」(Chevalier, *ibid*, p. 80. 仲沢訳、九一頁)との反論している。

(10)

Stendhal, *De l'Amour*, 1822. 前川謙市訳『恋愛論(上)』(岩波文庫)、一九三一年、二二二一—二二二四頁。オルテガは「スターハーダーの考へでは、〈情熱恋愛〉だけがほんものなのである。」それでもまだほんむの愛の範囲を広げずして、われたしは思ひ」(José Ortega y Gasset, *Estudios sobre el amor, Revista de Occidente*, 1941. 荒井正道訳「愛について」)『オルテガ著作集六』、白水社、一九七〇年、二二七九頁)との、スタンダードの〈情熱恋愛〉ならしく〈結晶作用〉に対しても懷疑の目を向けている。また、「愛の対象よりも愛そのものを愛する」と、情熱をそれ自体として愛すれば、アウグスティヌスの〈愛するのを愛した〉(amaban amare)から現代のロマンティシズムに至るまで、苦惱を愛し求めるところに他ならない。情熱恋愛とは、我々を傷付け、勝利によって我々を滅ぼすものを欲望するのである」(Denis de Rougement, *L'Amour et l'Occident*, Librairie Plon, Paris, 1956. 鈴木健郎・川村克巳訳『愛について・Hロスニアガペ』(岩波書店)、一九五九年、六一頁)との見解もある。

(11) Thomas Mann, *Der Tod in Venedig*, 1913. 実吉捷郎訳『死に去る人』(岩波文庫)、一九三九年、七一頁。同上、実吉解説二二二一頁。

(12) Chevalier, *ibid*, p. 102. 仲沢訳、一一六頁。

(13) *Ibid*, p. 103. 回上、一一七頁。

(14) Chevalier, *ibid*, p. 261. 回上「一九三頁。久米博「ベルクソン——時間の創造——」、饗庭孝男編『ユダヤ的〈知〉』と現代』、東京書籍、一九九三年、六七一—一頁参照。

(15) 前掲『世界の名著六四 ベルクソン』、森口註、四四九頁。

(16) セルティランジュ前掲書、一一一頁。そもそも「——チエにはキリスト教の聖人を超人化しようとする発想はなく、超人の具体像を「ホメロスの半神的英雄、ローマの、アラビアの、ゲルマンの、日本の貴族、スカンジナビアの海賊（ヴィーキング）などの騎士や戦士、武士（むののく）など）の武勇に勝れた存在に観たのではないか（Friedrich Wilhelm Nietzsche, *Zur Genealogie der Moral-Eine Streitschrift*, 1887. 秋山英夫訳『——チエ全集第三巻道徳の系譜』、白水社、一九八三年、四六頁）。——チエにおける「行動能力に富む（強者）」（島貴代志『創造と想起——可能的ベルクソンズム』、理想社、一〇〇七年、一三四頁）とは、こうした尚武に生きる存在となるのであら。ベルクソンはまた「この捉がひつつの書物〔聖書〕に記されただけであったなら、（聖書は）エピクテートスの『語録』や、マルクス＝アウレリウスの『自省録』のようなものとなつたでしょう。エピクテートスやアウレリウスの実践功績は何であつたでしょうか」（セルティランジュ前掲書、五六頁）と、『聖書』を『自省録』以上と考えている。けれども、マルクス＝アウレリウスは哲学者としてだけではなくて、ローマ皇帝として、政治家として、軍人としての実践功績もあり、この点に関してはベルクソンの批判は必ずしも的を射ていないようにも思われる。べー

(17)

Rose-Marie Mossé-Bastide, *Bergson éducateur*, PUF, 1954, pp. 32-33. 市川浩『ベルクソン』、講談社学術文庫、一九九一年、六〇頁。

ゲルは「古代においては、クセノフォンやカエサルなどこれらの歴史家は、必ず偉大な軍人または政治家であった。中世においては、国政の中心に立っていた司教等を除けば、修道僧が素朴な年代記作者としてこれに這入るが、彼等は古代の歴史家が公共の舞台に立っていたのと対照的に、全く孤独の中にゐるのでいた」（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, 1837. 武市健人訳『——ゲル全集一〇 歴史哲学』上巻、岩波書店、一九九四年、一一四頁）と、古代の歴史家と中世の歴史家の差異を記し、前者は公共性に関わる極めてポリス的な生活を送つていた傾向があつたのに対し、後者はいかにかと言えばポリティカルな場から離れて生活していた旨を述べているのではないだろうか。このベーゲルの指摘は、プラトン、アリストテリス、キケロ、マルクス＝アウレリウスなどの古代哲学者は政治実践と比較的近い位置に居たことを考へるう、哲学者にも該当するのではないだらうか。

付記：本稿は一〇〇八年三月二三日（日）に京都大学文学部で開催された第二三回ベルクソン哲学研究会などでの発表原稿を、加筆修正したものである。研究会等の場で、御質問、御意見を下さった全国のベルクソン哲学研究者の皆様方等には、この場を借りて感謝申し上げたい。